

令和7年度八尾市産業振興会議 第1回本体会議 議事録	
日 時	令和7年7月14日（月） 15時～17時
場 所	八尾商工会議所会館 3階 セミナールーム・多目的室
出席者	<委員11名> 山縣座長、木下副座長、岡田千津代委員、樫本委員、吉田委員、小林委員、岡田賢晃委員、杉山委員、今岡委員、中谷委員、山田委員 <事務局7名> 岩井部長、浅井次長、後藤課長、亀村参事、米田参事、山田課長補佐、運営支援事業者 永阪氏
－事務局による司会で次第に沿って進行－ 1. 開 会 事務局より、乾委員、北本委員、美馬委員、佐原委員、三宅委員、寺西委員、松田委員、佐藤委員の欠席を報告。併せて、全委員19名のうち11名の委員の出席となっており、八尾市産業振興会議規則第3条に規定する過半数の委員の出席により、本日の会議が成立していることを報告。 －魅力創造部長あいさつ－ 新たに委員になられた岡田賢晃委員、小林委員の紹介。 2. 議 事 （山縣座長による議事進行） (1) チェックイン グラフィックファシリテーターの永阪氏より、チェックインの方法について説明。 (2) スケジュールについて 事務局より資料に沿って説明。	

(3) これまでのふりかえり

事務局より資料に沿ってこれまでのふりかえりを説明。

岡田賢晃委員より資料に沿ってオープンファクトリーに関する情報提供。

(4) 検討部会からの報告

座長：本日の会議は、久しぶりの本体会議であり、12月には市長への提言書を報告する時期が迫っている。八尾市の産業振興会議は「産業が生活に関わるもの」という考え方で進められており、通常の産業振興会議では取り上げられないような、学校との関わりなど様々なテーマが議題にがる。また、雑談の中にも意味を見出し、参加者が自由に意見を出しやすい雰囲気を進めることを重視している。

事務局：昨年度の会議では「八尾にあるもの、ないもの」や「現状と課題」からスタートし、福祉、ビジネス、文化、環境、食といったキーワードで意見が出された。その後、「働きやすく、住みやすい八尾にするにはどうするか」というテーマで、「経済の豊かさ」や「人とのつながり」が重要であるという意見が出た。事業者が地域とどのように関わるかという議論から「相互理解」「コミュニティ作り」「見える化」といったキーワードが得られた。

事務局：前回の2月の本体会議では、万博後の八尾の産業の「好循環」をテーマにワークショップを実施し、八尾全体が吹奏楽部になって音楽を楽しむ、猫好きが集まる、学校環境改善プロジェクトといったユニークなアイデアが出された。これらのアイデアから、「地域資源の活用」「価値を生み出す行動」「多様な人の主体的参加」が好循環につながる要素であるという仮説が立てられた。また、継続には「稼げる仕組み」が必要であるとの意見も出た。こうした取り組みとして、オープンファクトリーが挙げられた。八尾市では2020年から「ファクトリズム」というオープンファクトリーイベントを毎年開催しており、全国的に取り組みが広がっている。

事務局：検討部会では、具体的な実証実験テーマとして、以下の2つに焦点を当て議論している。

1. 「出会いの場づくりプロジェクト」
2. 「学校環境改善プロジェクト」

これらのプロジェクトは、「多様な参加者がいて、それぞれが価値ある行動をすることで好循環が回る可能性が高い」と判断された。

事務局：まず、「出会いの場づくりプロジェクト」について、このプロジェクトは、若い従業員が出会いの機会が少ないという現実的な課題から生まれた。「出会いが生まれるまち」になるための課題、地域資源の活用、多様な人の参加、そして具体的な行動についてキーワードが出された。短期的な実証実験として、9月21日（日）に近鉄八尾駅前などを中心とした八尾市全域イベント「とにかく

触る博、八尾のまち工場が、お店が、広場がパビリオン～触れてつながる、まちの未来～」の一環として実施。このイベントでは、万博の機運醸成も兼ね、ミyakミyakのコスプレをしてきた人に特典を与えるといったアイデアも出ている。これは、楽しみながら多くの人が集まる「新しい祭り」のような場の創出が期待できる。

事務局：次に、「学校環境改善プロジェクト」についてです。これはすでに動き出している取り組み。学校、行政、企業、生徒、PTAといった多様な主体が役割を持ち、好循環を生み出している。今後は、活動を外部に発表する場を設けることや、イベント性を持たせること、仲間を巻き込むことなどが検討されている。特に「お掃除コンテスト」形式で清掃を行い、楽しみながら継続的な活動に繋げる工夫が話し合われている。このプロジェクトの成功体験から、「地域資源の活用」「多様な人の参加」「価値を生み出す行動」に加え、「共感・応援」「協働」「フィードバック（対話や効果検証）」といった要素が、さらに大きな好循環につながるという意見も出ている。

委員：「出会いをキーワードにした実証実験は難しいテーマだった。会社勤めで出会えない人が自然に集まれる場所の創出を目指し、万博の盛り上がりとミyakミyakのコスプレを組み合わせた実証実験は、「これが正解というわけではなく、色々なアイデアを出し、実際にやってみて検証する場」として位置づけている。

座長：「知らない人と出会う接点を作らないと新しい価値は生まれない」という点で、この「出会いの場づくり」は非常に重要。これは、面白さだけでなく、継続性を持たせることで「新しい祭り」になる可能性を秘めている。

委員：「学校環境改善プロジェクト」の発端は、曙川南中学校の生徒からの「トイレが汚い」という声であった。そこから「学校全体の環境を良くしたい」という生徒たちの思いが広がり、予算だけでは解決できない課題に対して、自分たちで何ができるかを考える取り組みへと発展した。企業が「物事を進めるための企画の立て方」などを指導し、生徒たちが自ら「お掃除コンテスト」のような楽しみながら継続できる活動を考案していった。

委員：「学校環境改善プロジェクト」の具体的な経緯について、まず、ウォータークーラー設置の要望から始まり、生徒会が自ら企画書を作成し、必要な資金や維持管理について考え、PTAの協力を得て実現した成功体験があった。この成功体験が、次の「トイレ清掃」の取り組みにつながり、生徒たちがアンケート調査を行うなど主体的に活動を展開した。企業との連携を通じて、生徒たちは企画の立て方などを学び、現在「お掃除コンテスト」として全校生徒を巻き込む形で進めている。また、生徒が企画・運営する昼休み中のイベント「ASF（曙川青春フェスティバル）」では、200名規模の参加者を集めるなど、生徒の主体的な活動が活発化している。これらの取り組みは「自分たちが考え、学校を良くしていく」という生徒の意識変革を促している。

座長：このプロジェクトは「物の形だけのデザインではなく、広い意味での参加型デザイン」である。当事者が参加し、共にアイデアを出すことで、より前向きで持続

可能な解決策が生まれる。この取り組みは学校だけでなく、他の分野にも応用可能である。

(5) 提言書の目次と構成

座長より、以下の提言書に記載する目次と構成（案）を資料に沿って説明。

■第1章 本提言書の背景

八尾市からの諮問内容の背景

データによる現状分析（人口減少・万博関連データ）

■第2章 理論的枠組み

■第3章 実証実験と好循環につながる事例

実証実験までの道のり

実証実験の実施

好循環につながる事例（既に取り組まれているもの）

■第4章 考察

八尾市の地域性（他地域との比較から）

実証実験、事例からみえてきたこと

その他

■第5章 提言

(6) ワーク

座長よりこれまでの検討部会の議論を踏まえ、「市民生活の中に転がっている課題やアイデアを、どうやってひろいあげ、形にするか」というテーマでワークを行うことが提案され、ワークを実施。

・声のひろいあげ方

委員： 現状では、市民団体など多くの活動があるが、その中で見えてくる課題を「どこに言えばいいか分からない」という声が多い。

委員： 行政がデジタル化を進めているため、情報を集めやすい側面もある。

委員： 子どもの活動を集約する「ほっぷ」のような、何でも相談できる「よろず相談」的な場所が産業分野でも必要ではないか。ただし、行政が「何かにはめ込もう」とせず、「とりあえず話を聞く」機能が重要。

委員： 匿名性があってはいけない。誰がどんな意見を言っているかを明確にし、それに賛同する人を募るような形式が望ましい。

委員： デジタルツール、例えば「まちのコイン」やメルマガの活用が効果的。これらは24時間いつでもアイデアを発信でき、インセンティブを設けることで多くの声を集めることができる。

・形にする方法（実現性）

委員： 「解決してもらおう」と待つのではなく、「自分たちがやりたい」という人をうまくつなぎ、協力者を募るプラットフォームが必要。

委員： 集められた多量の意見をAIが分類し、適切な部署や団体に振り分けたり、関連する情報や人をつなぎ合わせたりする機能があれば、効率的に解決に導ける可能性がある。

委員： この「声を拾い、形にする仕組み」自体を、八尾市の「実証実験の場」としてブランディングしてはどうか。これにより、新たな企業や団体、個人が「ここでもなら新しい挑戦ができる」と認識し、多様な人材が集まるきっかけになる。

委員： 成果の設定が難しい。定量的・定性的な目標設定の両方が必要であり、特に「どういう状態になったら良いか」という状態目標の設定や、それを言語化するサポートが重要。ウォータークーラー導入やトイレ清掃コンテストのように、少しずつでも「良くなっている」ことが見える化され、達成感を得られる仕組みが、持続的な活動には不可欠。

座長： 提言書では、今回の議論を踏まえ、市民生活における課題やアイデアをどう拾い上げ、どう形にするかという部分を、提言書の第4章に反映させていく予定。また、この産業振興会議は、書くよりも喋る方が先に意見が出るという特徴があるので、自由に活発に議論を続けてほしい。

(7) その他連絡事項について

事務局より資料に沿って説明。

次回の産業振興会議は「検討部会」となり、令和7年9月1日と29日に開催予定。本体会議は11月17日に開催予定。

— 産業政策課長あいさつ —

3. 閉会

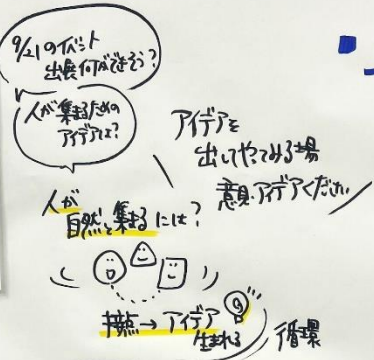
以上

$\frac{2}{3}$

● 恋がはれるまち'てあ...

● 学校環境改善プロジェクト

● グループワーク



子で...
いい学校に...
生徒が自発的
参加型デザイン

＜参考：当日のワーク＞

